

# ◆連載

# いよ 留萌むかし 第四十九話

## ●中江兆民の来留

留萌 此日(九月三日)正午到着す。昼飯を畢はり、馬を替えて復た発す。留萌は増毛に比すれば、他日良港と為る可き資格を具へ居るやに見ゆ。唯留萌川暴漲する時は、或は湾中に遊泥を齎らし来る患無きや否や、増毛、留萌俱に蕭疎たる站駅なり。而して粉面紅頬媚を売り客を招く牝馬牛有り。我れ是に於て、北海道の淫国たるを知る。此先きに到処皆然らざる莫し。蓋し練粕製造所は、正に是れ徹毒の醸造場なり。

これはかの自由民権運動の理論的指導者であった中江兆民が明治二十四年に留萌を訪れた際に知ること紀行文の一節である。

彼は弘化四年(一八七四)、土佐藩士族の家に生まれ、フランス留学で自由主義思想に傾倒し、帰国後は自由民権運動の理論的指導者として活躍した。

明治十四年(一八八一)西園寺公望らが中心として発刊した「東洋自由新報」の主筆として自由民権運動を理論的に指導した。その後、第一回帝國議會選挙に自由党より出馬し、当選した。しかし、藩閥政府と自由党との妥協を批判し、明治二十四年(一八九一)に衆議院議員を辞職し、野に下った。

失意の中にあつた彼は当時日本亡命中であつた朝鮮の獨立党の指導者金玉均の紹介で小樽の実業家金子元三郎の創刊した「北門新報」の主筆に迎えられ、小樽にやってきたのである。折しも北海道でもやっと自由民権運動の波が押し寄せた時期であつた。当時道央では新聞といへば体制寄りの北海道毎日新聞よりなく、民権運動の高まりとともにライバル紙の発刊が望まれていた。彼は北門新報の主筆として

北海道庁の施政、アイヌ問題等に痛烈な批判を寄せている。

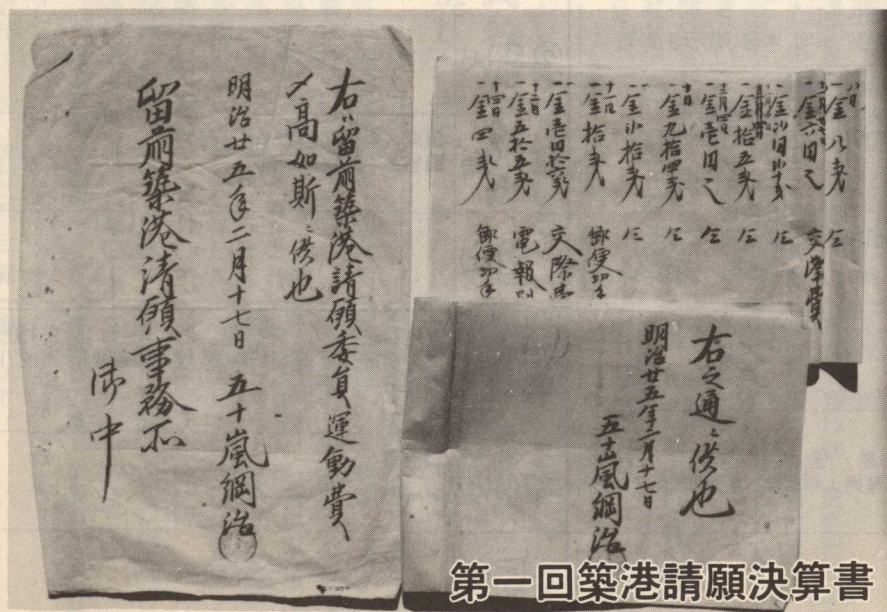
彼が主筆に迎えられたのは明治二十四年七月二十七日であり、留萌を訪れたのは渡道してまだまもない時期である。主筆として開拓間もない北海道の事情を肌で感じるための道内旅行であつたらしい。また、新聞人らしく当時の留萌築港問題を取り上げ、増毛より留萌の方が港として将来性があるとしている。ただ、留萌川が氾濫したときに、港内が埋まってしまう可能性を指摘している。留萌築港の第二回帝國議會への請願が同年の十二月二十二日以降のことであるので、どこから留萌築港の問題を聞いたのか興味のある問題である。また、増毛との比較を行っているところをみると、留萌築港問題は明治二十四年以前から北海道内で

は話題になつていたと考えられる。

また、増毛留萌は小さな田舎の村ではあるが、そこにはかならず白粉を塗った女たちが居り、西海岸の鯨場はどこもそうである。そのうち鯨場はすべて梅毒の巢になるであ

らうと批判している。鯨場の風紀の乱れを憂い、彼の性格の一面を現わしている一文である。

彼の滞道はわずかであつたが北海道の政界新聞界におよぼした影響は大きい。



第一回築港請願決算書